

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 陳 磊

論 文 題 目

“真詩”論的形成——程朱理學背景下的詩論發展  
(「真詩」論の形成 —— 理学時代の詩論發展過程)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 井上 進

委員 名古屋大学教授 加藤国安

委員 名古屋大学教授 加藤久美子

委員 名古屋大学准教授 林 謙一郎

## 論文審査の結果の要旨

### 本論文の概要

明代の文化史は当初の百年間を通じ、すこぶる単調な、色彩の乏しいものであったが、十六世紀以降急速な変容を遂げ、明末に至れば新しい可能性が一斉に花開くこととなった。こうした明代後半期の文化が示した可能性の一端を、文学の面で象徴することばが「真詩」である。既成の詩文をニセの人によって作られたニセの文学であるとするこの「真詩」論は、わが国の入矢義高によってはじめて特に注目され、深く研究されたところなのであるが、本論文はこの文学史上のトピックを思想史の立場から考察し、「真詩」ということばの出現より「真詩」論の成立へと至る過程を追究することを通じ、その精神的な位置づけ、ないし意味を探ろうとしたものである。

まず緒論において研究史と本論文の立場が示された後、第一章より第三章までは、明代以前における「真詩」なることばの用例、およびそれが意味するところを検討している。これまでの研究では指摘されていないことであるが、「真詩」なることばの使用例は、早くも両宋の際の人である阮閲の著作中に登場している。ただしそこでの「真詩」が意味するところは、事実をそのままに伝えた「史」としての「詩」、「詩史」の範疇で理解すべきものであって、なお独立した詩論とはなりえていない。この点は金末元初の人王若虚が引用した南宋の人何厚の詩論においてもほぼ同様で、鄭氏は他人の詩に合わせて押韻する「次韻」に反対して、そのような内発性に乏しい詩は「真詩」ではない、と言っているにすぎなかった。しかしながら、この鄭厚の論を引用した王若虚が「真詩」の語に込めた意味は、鄭氏の原意とはすこぶる異なるものであった。なぜなら王若虚が用いる「真」という語は、常に宋代学術に対する批判的立場から発せられているからで、彼にとっての「真詩」とは、その詩論から考えても、詩の本質たる「情性」の真実を表現するものを意味するに違いなかった。

第四章は宋代以来の詩論ないし文学論を決定的に規定していた理学の文学観、およびその明初までの展開を考察している。正統理学が文学に認めたのは、「道を載」せる道具としての役割だけで、文学独自の価値などというのは論外であった。こうした観点は、元明間の儒者にもむろん継承されているのであるが、にもかかわらず明初の宋濂などは、理学における「気」の理論を援用しつつ、詩文の価値を穏やかな形で主張しようとしており、それは李夢陽らの出現を準備するものであった。

第五章では真正の意味での「真詩」論の創始者、李夢陽が考察される。李氏の文学論は、遠くは王若虚の「情性」説、近くは宋濂などの努力、すなわち厳しい限定を設けつつも、とにかく文学に独自の価値を認めようとする努力を承け、まずは詩の本質を「真情」に在りとし、そこから今の人、今の詩にも「真詩」がありうることを、そしてすでに「真詩」であれば、その詩にはそれ自体の、独自の価値がそなわりうるのだ、という主張に至ろうとした。つまり李夢陽は、ちょうど明初以前の文学観を明末のそれに転換せしめる、まさにその結節点に位置していた、というのが結論である。

## 論文審査の結果の要旨

### 本論文の評価

本論文が挙げた成果のうちもっとも評価すべきなのは、「真詩」論形成のゆえんを、宋代以来の文学観という長い射程の中で考察し、そうしたものが出現してくる論理を解明したことであろう。もとより宋代における「真詩」の説は、結局のところ孤立的、ないし偶発的なものでしかなく、その間に積極的な継承、発展関係といったものは認められないのであるが、しかしその用例が意味するところにはやはり変化が存在し、金元の際の王若虚に至れば、「情性」の真という、後の「真詩」論を準備する観点もすでに現れはじめていた、という指摘は貴重である。

さらにこれに加え、元末より明初の、朱子学の学界に対する支配力がもっとも強かった時代に、すでに文学の価値に関する新しい動きの萌芽が認められ、著者によればそれは正統思想の権化のような、「醇儒」薛瑄においてさえ認められるということも、ひとつの「発見」といってよいであろう。「真詩」論の登場にはこうした前史、ないし精神的背景があったのであり、さればこそ李夢陽の「真詩」論登場には、ある種の必然性があったのだ、という本論文の主張ははなはだ説得的である。

また李夢陽の主張が同時代的にひろく受け入れられ、時代を画するものとなりえたことにつき著者は、それは彼が理学の伝統を十分に意識し、その理論的枠組みをうまく利用しつつ、しかも最終的には反理学の方向性を導くように議論を展開したからだと説明しているが、これもすぐれた歴史解釈といえることができよう。つまり彼の主張は、当時の知識人が熟知していた理学の概念を用いながら、理学によって規定されていた既成の文学理念を、内側から突き崩そうとしたのであり、それゆえにこそ彼の主張はひとつの運動、明代史上はじめての、「われら」が独自の文学を創出しようという運動となりえたのだ、というわけである。

以上のように、本論文が「真詩」論研究において挙げた成果にはすこぶる優れたものがあるのだが、それはむろんのこと瑕疵や不足がないということではない。李夢陽の詩論が既成の文学概念に対する挑戦であったというのはよいとしても、ならばそれはなぜ擬古という方法を採用せねばならなかったのか。また明末の有力な「真詩」論者はすべて反擬古派であるが、このことは何を意味しているのであろうか。こうした疑問に、本論文は必ずしも満足のいく回答を提出していない。また本論文が詩論の思想史的研究であるのならば、古く鈴木虎雄より提出されている、李夢陽と王陽明との関係やいかんという問題にも、現段階における見解を示しておくことが必要であろう。さらにその文章表現が、往々にして散漫、冗長となりがちであるのもぜひ改善すべき点である。とはいえ、本論文が「真詩」論研究に新しい方向性を切り拓き、その形成過程につき独自の見解を提出したことは、なお十分に評価されるべきである。よって審査委員一同は、本論文が博士（歴史学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。